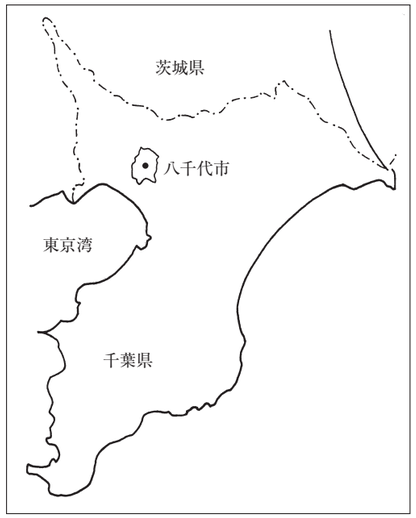
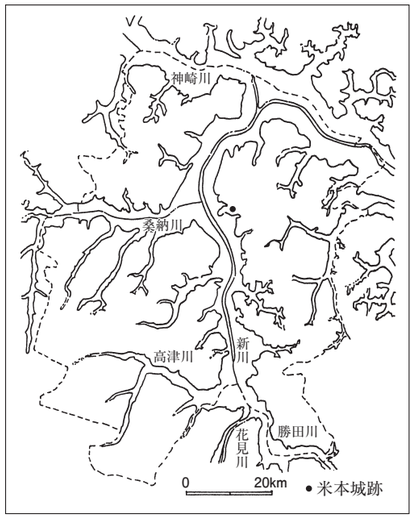
千葉県八千代市

米本城跡ｂ地点

－共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－





２０２１
加茂　文雄
八千代市教育委員会

千葉県八千代市　米本城跡ｂ地点－共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
２０２１　加茂　文雄　八千代市教育委員会

中国産漳州窯系磁器・染付碗

中国産景徳鎮窯系磁器・染付碗

凡　　例

1　本書は，八千代市米本字内宿南1732－１の一部他に所在する米本城跡ｂ地点の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は，確認調査を国庫･県費補助事業として，本調査は，民間開発等埋蔵文化財調査事業として，事業者より調査協力金を納付いただき，八千代市教育委員会の委託事業として実施した。
3　発掘調査・本整理作業は以下のとおりである。
［調査］確認調査　　期間　平成30年７月19日～７月27日 面積　120㎡/1,274.22㎡　担当　宮澤　久史
　　本調査　　期間　令和元年12月３日～令和２年２月10日　面積500㎡　　担当　森　竜哉
　　調査補助員　板橋三郎・伊藤衣莉加・鈴木一代・萩原雄一・室中勝典・山本みつ江・藤田千博
　　山田俊二
［整理］図版作成　　期間　令和２年７月８日～９月10日　担当　森　竜哉
　　整理補助員　伊藤衣莉加・柴田清加
4　本書の編集・執筆は，森がおこなった。
5　現場の遺構写真及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。
6　本書の作成・刊行については，整理補助員と森が協力して行い，森が統括した。
7　出土遺物，実測図等の資料は，八千代市教育委員会が保管している。
8　本書の遺構番号は，発掘調査時の番号を使用している。
9　遺構・遺物の縮尺は，下記のとおり統一しているが，位置図・全体図等は別記した。
　［遺構］ピット（01P・04P・05P・06AP・06BP・08P）１/30，（03P・02P）１/80
　［遺物］全て１/３
10　遺物実測図の中軸線サイドの空きは，復元実測を示す。
11　遺構遺物のスクリーントーンは，その都度説明を加えた。
12　本書使用の地形図等は下記のとおりである。
　第１図　国土地理院発行　１/50,000佐倉に加筆
　第２図　『八千代市中世館城址調査報告』1978
　第３図　八千代市発行　１/2,500八千代都市計画基本図
13　発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導，ご協力いただきました。記して感謝いたします。（敬称略）加茂文雄　大東建託（株）日暮邦夫　道上文　千葉県教育庁文化財課

本文目次

第１章　序説
　第１節　調査に至る経緯……１
　第２節　調査の方法と経過……１
　第３節　周辺の城館跡について……１
第２章　検出された遺構と遺物
　第１節　土塁・溝……６
　第２節　ピット……10
第３章　まとめ
　中世以降……17

挿図目次

第１図　周辺の城館跡……２
第２図　米本城跡測量図……３
第３図　調査地点……４
第４図　遺構配置図……５
第５図　土塁測量図……７
第６図　土塁土層断面図……８
第７図　01M・土塁出土遺物……９
第８図　01P.04P.08P遺構実測図　……11
第９図　01P出土遺物　……11
第10図　03P遺構実測図・出土遺物　……12
第11図　05P.06P遺構実測図・出土遺物　……13
第12図　02P遺構実測図・出土遺物（１）　……14
第13図　02P出土遺物（２）　……15
第14図　確認調査出土遺物……16

図版目次

巻頭図版中国産磁器・染付碗２点
図版１遺構［pit・土塁］
図版２遺構［土塁］・遺物[土塁・01M］
図版３遺物［01P.03P.06P.確認調査］
図版４遺物［02P］

第１章　序　　説

第１節　調査に至る経緯

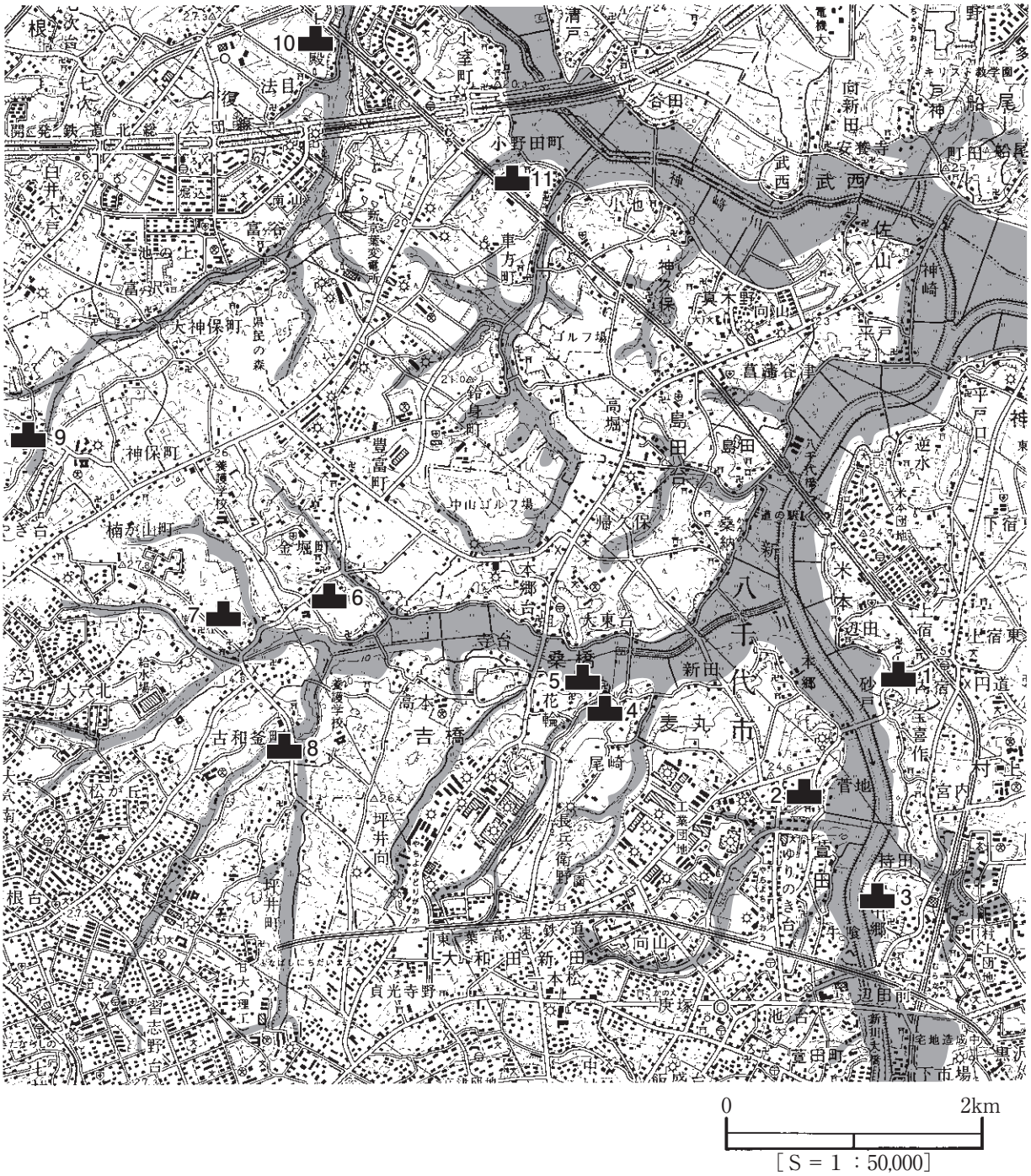
平成30年４月，加茂　文雄　氏（以下事業者という）から，共同住宅建設を予定する旨で「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会に提出された。確認地は，市遺跡№117米本城跡の範囲内であり，予定地内に土塁が確認されることから，文化財保護法第93条の届出が必要な旨回答した。届出を受けて，協議の結果，確認調査を実施することとなり，農地の一時転用許可後の平成30年７月に確認調査を実施した。その結果，中近世土塁１条・同土坑１基が検出され，その後の協議により記録保存の措置をとることとなり，委託契約書の締結等諸準備が整った令和元年12月本調査に着手した。

第２節　調査の方法と経過

調査期間は令和元年12月３日～令和２年２月10日で，12月３日～10日調査区整備，12月11日～16日土塁測量図作成，12月24日～令和２年１月10日重機による表土剥ぎ・土塁断ち割り，１月14日～22日土塁土層断面図作成・01P・02P調査を行う。１月24日～27日土塁下及び周辺部の重機による表土剥ぎ後，１月29日～２月10日にかけて01M ～03M，03P ～08Pの調査・実測を行いつつ，最終的に全景写真撮影を行い，機材撤収を含め調査を完了とした。

第３節　周辺の城館跡について（第１図）

今回調査地点を含む**新川流域**では，東岸の１米本城跡，３正覚院館跡，西岸の２飯綱砦跡遺跡が占地する。米本城跡は，四郭からなる直線連郭式の城で，土取りで主郭部分は失われているが，南北300m×東西150mの規模をもつ。根古屋･りゅうげ等の地名や井戸･腰廓･虎口等の施設，防御性の高い主郭･Ⅱ.Ⅲ郭の構成から，戦国時代に整備，機能とされる。３正覚院館跡は二郭からなる防御部分とその東側に一段低い館想定部分から構成される。南北120～160m×東西120mの規模で，台形上の平面をもつ。これまでの調査成果から，14世紀から16世紀に機能したと想定される。また南に隣接する浅間内遺跡では，２条の溝に区画された範囲内に地下式坑・火葬施設・土坑等や当該時期の茶臼・陶器・内耳土鍋と言った生活品が出土している。**桑納川水系**では，４尾崎館跡，５吉橋城跡やその西側奥部北岸に６金堀城跡，７楠ヶ山館跡，南岸の駒込川沿いに８坪井城跡が占地する。吉橋城跡は，Ⅰ郭・Ⅱ郭が土塁・堀により遺存するが，Ⅰ郭・Ⅱ郭の西及び南西に広がる台地上等を含む範囲が城域と想定される。近接する妙見前遺跡では，幅10m･深さ４mの堀が検出され，中世国産陶器や中国産磁器，銭貨等が出土した。また同台地の渋内遺跡では，15世紀後半の地下式坑（地下倉庫）が11基発見されており，生活空間の一部と想定できる。尾崎館跡は，土塁・堀を東及び南に配置し，長方形状の郭を持つ。吉橋城跡の堀底道に隣接しており，明らかに根古屋として位置づけられる。吉橋城跡西側の金堀城跡は，方形に土塁が巡る。詳細は不明である。楠ヶ山館跡は堀・縦堀・土塁・櫓台等により構成，主郭を取り囲む形で３郭が遺存する。戦国時代に比定される。金堀城跡，楠ヶ山館跡，坪井城跡等も吉橋城跡との位置関係から，地域有力者層による水田経営や戦時拠点の場といえよう。**神崎川流域**では，南岸の台地先端部に11小野田城跡，支谷奥に９八木ヶ谷城跡，10長殿城跡が占地する。小野田城跡は，明確な二郭と距離を隔てた南側に土塁･堀等の防御施設を配す。東西150m×南北160mの規模で，方形に近い平面形である。八木ヶ谷城跡は，開発によって消失した部分が多いが，土塁･縦堀等が確認された。位置的には谷奥にあたり，７の楠ヶ山館跡に近い占地となっている。土地利用上は北側谷津部分を効果的に活用したといえよう。西側隣接地の八木ヶ谷王子遺跡からは，中世墓跡と板碑が検出されており，同台地上の土地利用を考える点で興味深い。

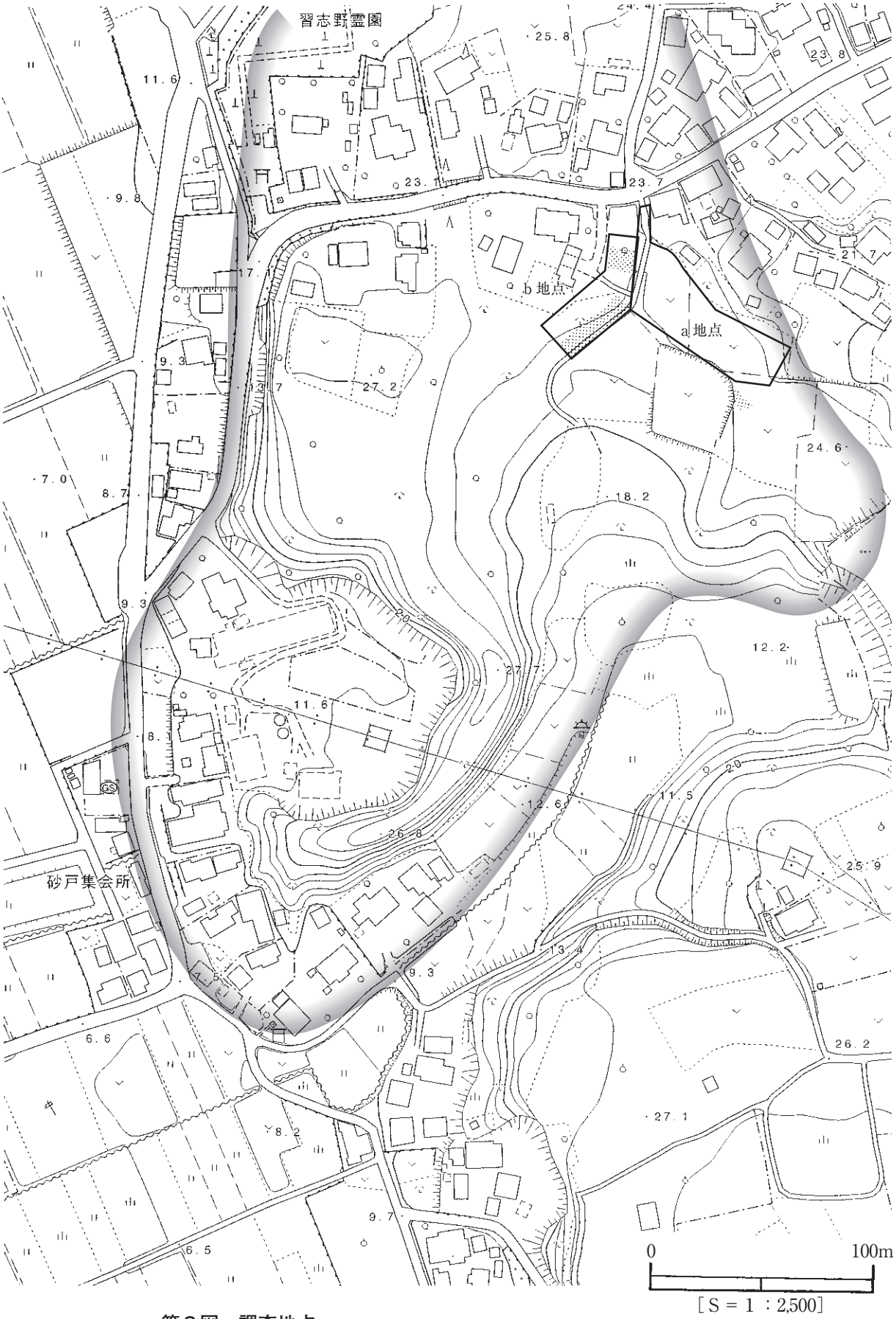


第１図　周辺の城館跡

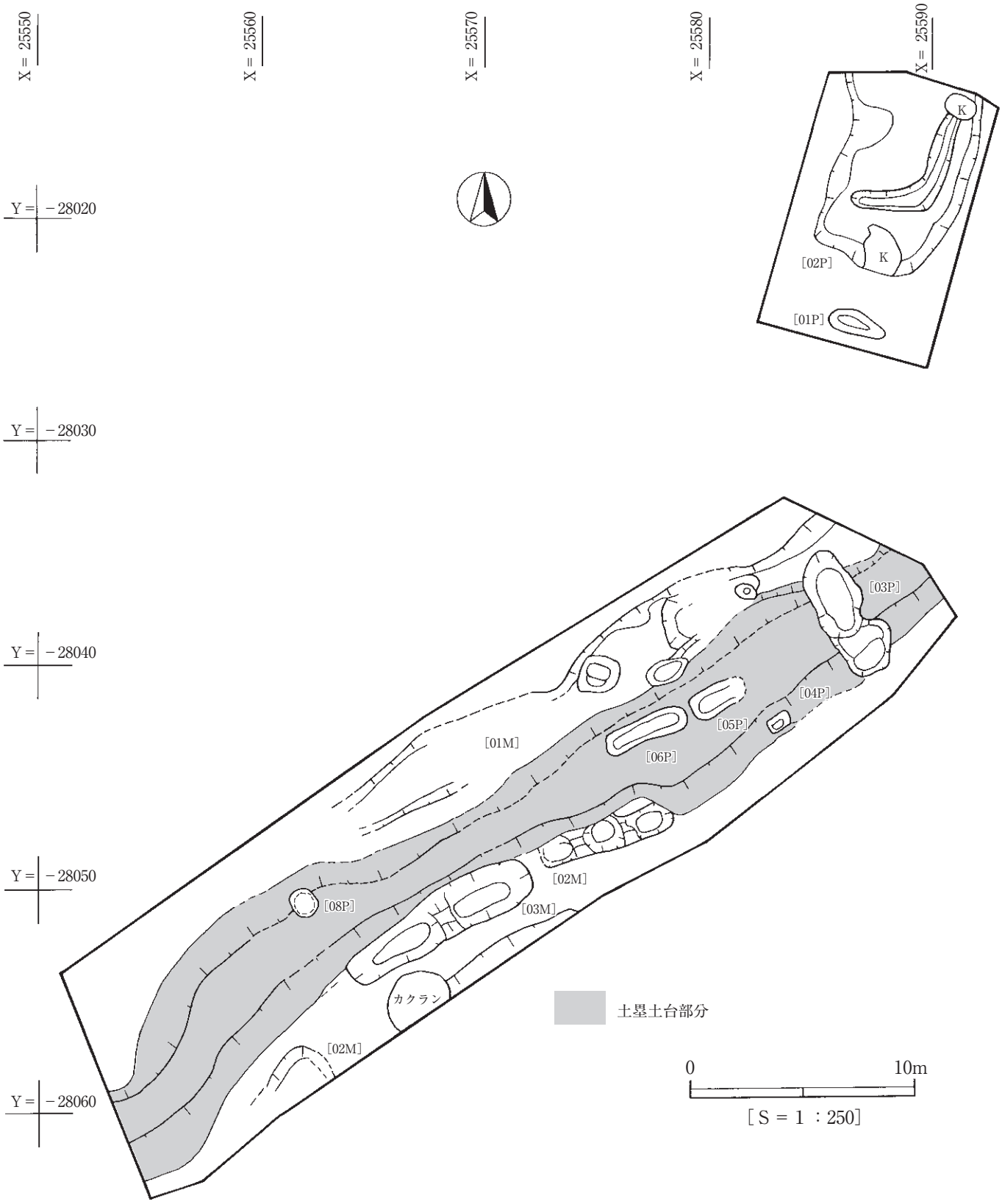
1. 米本城跡　2. 飯綱砦跡遺跡　3. 正覚院館跡　4. 尾崎館跡　5. 吉橋城跡　6. 金堀城跡
7. 楠ヶ山館跡　8. 坪井城跡　9. 八木ヶ谷城跡　10. 長殿城跡　11. 小野田城跡

古左衛門
新左衛門
喜左衛門
安左衛門
市左衛門
文左衛門
市郎左衛門
古川
大工
富右衛門
カゴヤ
助さん
元右衛門
オケヤ
一の堀
Ⅳ郭
Ⅲ郭
二の堀
二の堀
Ⅱ郭
根古屋
三の堀
三の堀
Ⅰ郭
とうふや
八右衛門
三郎右衛門
常右衛門
かじや
N
0 10 30 50m
［S＝1：1,500］
※右上スクリーン部分
調査区

第２図　米本城跡測量図



第３図　調査地点


X = 25550
X = 25560
X = 25570
X = 25580
X = 25590
Y = −28020
Y = −28030
Y = −28040
Y = −28050
Y = −28060
K
K
[02P]
[01P]
[03P]
[04P]
[05P]
[06P]
[01M]
[02M]
[03M]
[08P]
カクラン
[02M]
土塁土台部分
0
10m
[S = 1 : 250]

第４図　遺構配置図

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　土塁・溝

今回の調査では土塁１条，溝３条を検出した。以下に報告する。

土塁（第２.３.５～７図・図版１.２）

本跡は，調査範囲は第２図のスクリーントーン部分にあたるが，文左衛門家を取り囲むように配置されている。全体としては，南北に緩くカーブを描くように95mで，西に屈曲し30m，南北に分岐し，北方向に60mで文左衛門家の裏手北側に至る。南方向は45mでⅣ郭北西角へ至る。

本調査区の土塁について言及すると，全長44.0m・幅7.2m，標高は北側で頂頭部24.5m，屈曲部分の南側で25.0m，南側に高さを増している。低い部分との比高差は北側で1.2m，南側で1.7mである。

各トレンチについて説明を加える。各トレンチとも基盤となる土台層はハードローム層で，屋敷地を含む範囲で大規模な切土による整形工事を行なっている。１Tでは，A´側に積み上げ層が痕跡としてあり，その東側に堀の落ち込みが想定される。２Tでは，積み上げ層の痕跡が僅かに残る。B´側は02Mによる後世の切土で土塁部分は消失している。３Tは，ハードロームの土塁土台の遺存が他トレンチより残っている状況で，ハードローム地山盛り上がりが観察される。本来はこの東側に積み上げ土が遺存したが，02Mによる切土で失われた。１T.２Tとも，土塁積み上げ土の西側に，土塁土台である地山盛り上がりがあったと想定している。

土塁は城廃絶後に，意図的ないし土地利用上の目的から，削平と堀の埋め戻しが進められ，現在見る状況に至った。本来の土塁・堀の比高差は現状で1.7mであるが，防御上や堀の埋め戻しを考慮すれば，３m以上とも想定されよう。

遺物は，土塁封土中・削平時の混入であるが，15世紀後半～17世紀初頭の時間幅が見られる。

01M（第４図）

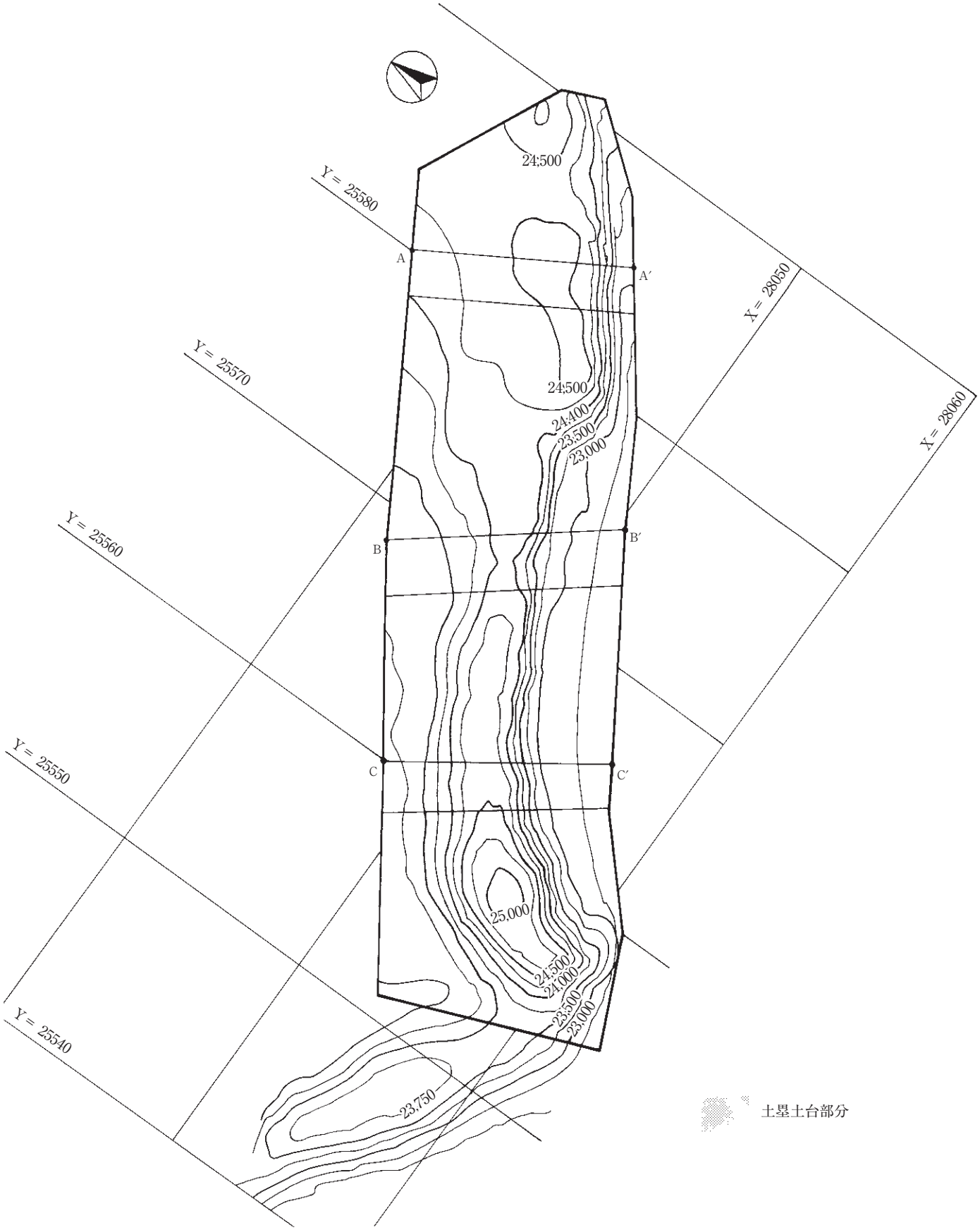
位置：土塁土台部分に平行するが，北側で重複。**確認面**：ハードローム上面　**方位**：N-60°-E **全長**26.2m×幅2.2～3.5m×深さ0.1～0.7mの逆台形。**壁**：北側では明確な掘り込みを持つが，南側で浅くなり消失する。**底面**：後世のカクランによる凹凸が著しい。**覆土**：褐色土系の人為堆積。**遺物**：混入遺物と想定される中世擂鉢，小刀，硯片，砥石片が出土した。**備考**：土塁土台部分を切る。01M上層において，硬化面が検出された。土塁→01M→硬化面（道路）の時期差がみられる。

02M（第４図）

位置：土塁に重複する。**確認面**：ハードローム上面　**方位**：N-68°-E **全長**23.1mの範囲で２口～３口の不連続なラインで遺存。北側は３口で全長6.3m，１口の掘り込み1.9×1.3m×深さ0.4mの長方形プランが連結する。中央は２口で全長9.3m，１口の掘り込み4.3×2.2m×深さ0.5mの楕円形プランが連結する。南側は１か所の掘り込みを確認した。**壁**：全体に明確な掘り込みを持つ。**底面**：平坦に整えられている。**覆土**：暗褐色土で１～２㎜大のローム粒を含む。締まりなくサラサラ。**遺物**：図示していないが，江戸時代後期の比較的新しい陶磁器片が出土した。**備考**：土塁を切る。覆土が締まっておらず，イモ穴等農作物貯蔵用施設と想定される。

03M（第４図）

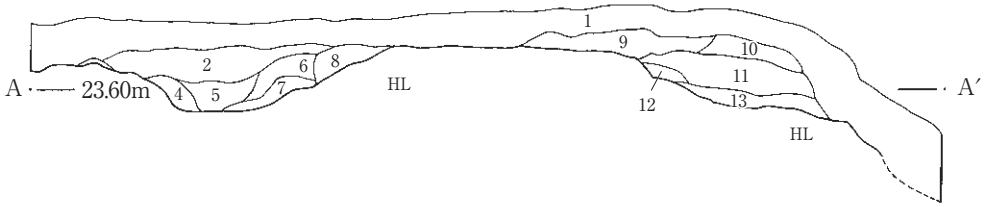
位置：南側調査区中央の東隅に部分的に遺存。また，土塁トレンチ１Tセクション東側に一部反映される。**確認面**：ハードローム上面。**遺物**：出土せず。**備考**：本遺構は土塁に伴う堀で，農道下に遺存すると想定する。



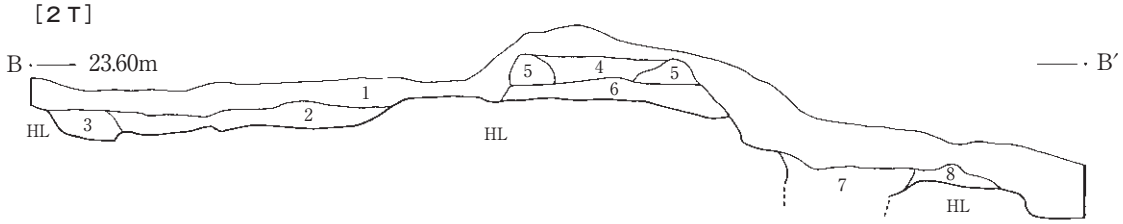
0　　10m
［S = 1 ：250］

第５図　土墨測量図

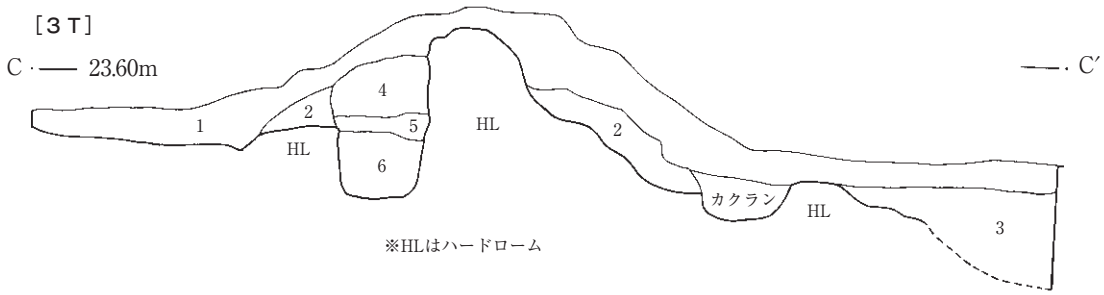
［１Ｔ］



［２Ｔ］



［３Ｔ］



※HLはハードローム

0　　2m

［S ＝ 1 ：80］

土塁１T土層説明

1：表　　土　黒色土、腐食土。
2：暗褐色土　黒色土、ローム混合層。粒子細かい。
3：褐 色 土　ローム土。やや締まり欠く。
4：褐 色 土　ローム土主に黒色土粒混入。
5：褐 色 土　４層類似。黒色土少ない。
6：褐 色 土　暗褐色土にロームブロック混入。ややぼそぼそ。
7：黒褐色土　暗褐色土＋黒色土。やや締まる。
8：褐 色 土　ローム主に暗褐色土混入。締まる。
9：暗褐色土　ローム粒混入。締まる。
10：褐 色 土　ローム土主に暗褐色土混入。締まる。
11：暗褐色土　黒色土混入。粒子細かい。
12：暗褐色土　ローム・黒色土混合。締まる。
13：褐 色 土　ローム主に黒色土混入。
※ 2～8　01M覆土　9～13　土塁積み上げ土

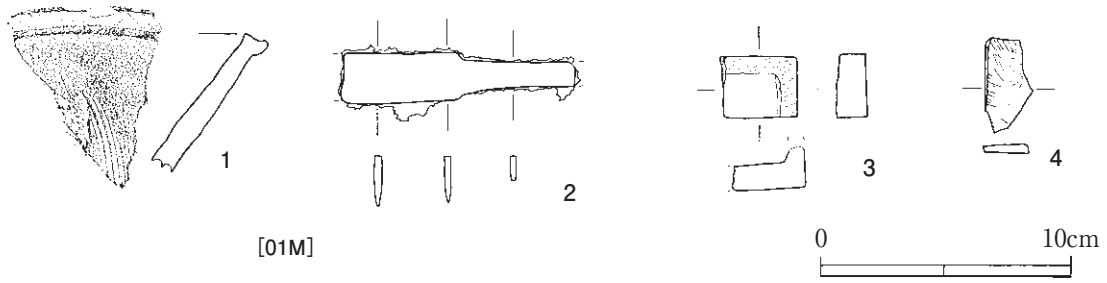
土塁３T土層説明

1：表　　土　黒色土、腐食土。
2：褐　色　土　ローム、ロームブロック混合層。ややぼそぼそ。
3：暗 褐 色 土　黒色土、ローム混合層。ややぼそぼそ。
4：淡灰褐色土　灰色粘土＋暗褐色土
5：暗 褐 色 土　黒色土に灰色粘土ごく少量混入。５mm大ロームブロック混入。
6：褐　色　土　灰色粘土、ロームブロック、黒色土混合層。
※ 1～3 土塁積み上げ土　4～6 土坑覆土

土塁２T土層説明

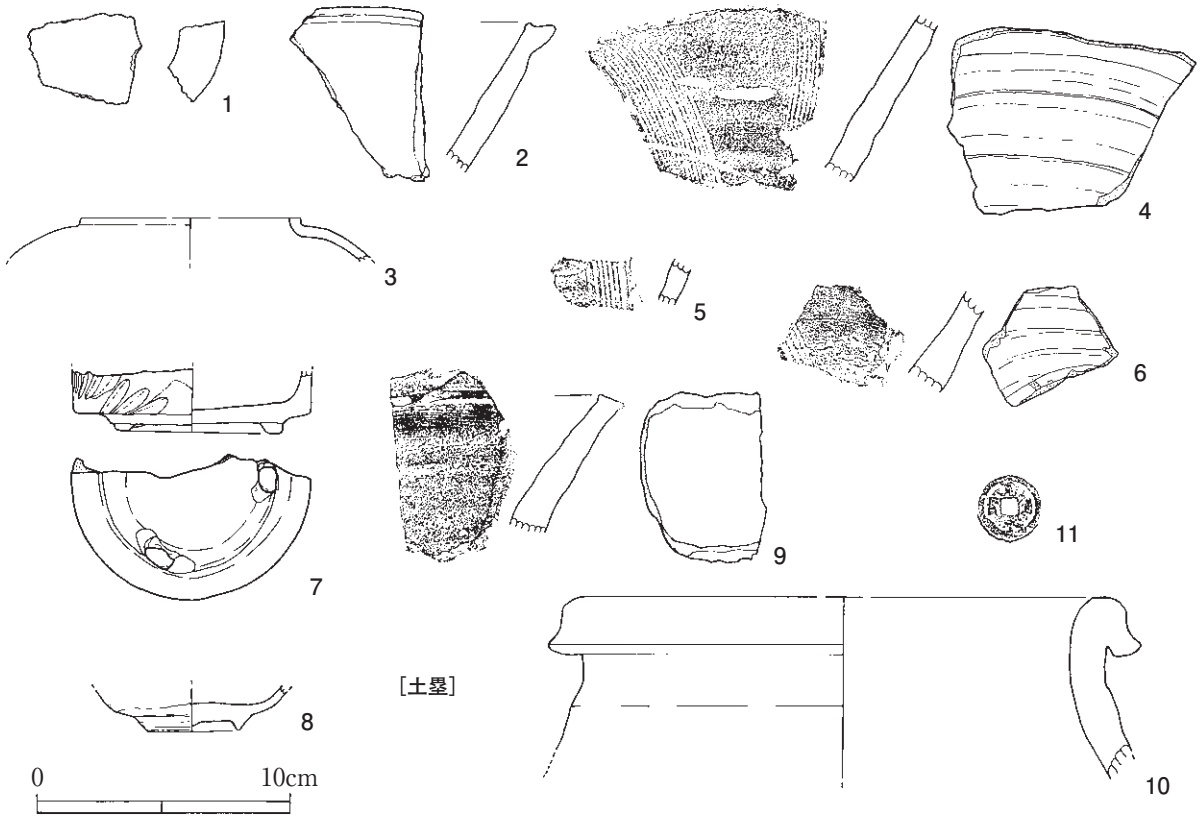
1：表　　土　黒色土、腐食土。
2：黒 褐 色 土　ローム粒及びロームブロック少量含む。
3：暗 褐 色 土　ローム、黒色土粒混合層。
4：暗 褐 色 土　ローム、黒色土粒混合層。やや締まり欠く。
5：褐　色　土　ローム、ロームブロック混合層。締まっている。
6：黒 褐 色 土　ローム粒少量含む。締まっている。
7：暗 褐 色 土　黒色土、ローム、ロームブロック混合層。やや締まり欠く。
8：暗 褐 色 土　７層類似。ロームやや少ない。
※ 1～3 01覆土　　4～6・8 土塁積み上げ土　7　土坑覆土

第６図　土塁土層断面図



01M 遺物観察表

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	土器	擂鉢	口縁部片	-	-	-	良	内外淡橙褐色	雲母 , 長石 , 石英 砂粒	内外ナデ。16 世紀代。
2	鉄器	小刀	刃部・茎部 両端欠損	遺存長 9.6	刃部長 2.1	茎部長 1.4 ～ 1.0	重さ 21.0g			
3	石製品	硯		遺存長 2.3	遺存幅 3.1	縁幅 6.0	墨池厚 1	灰白色	石材 砂岩質	下辺に 2 次使用の擦り痕。 重さ 15.1g。
4	石製品	砥石 （仕上げ砥）		遺存長 3.7	遺存幅 1.9	-	重さ 3.4g	淡橙白色	石材 頁岩	2 辺角部分擦痕あり。



土塁遺物観察表（1）

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	瓦質土器	火鉢	胴部上半部	-	-	-	良	内外黒灰色	ち密	
2	土器	擂鉢	口縁部片	-	-	-	良	内外淡橙褐色	長石，雲母	瀬戸・美濃産擂鉢模倣。16 世紀後半。
3	瀬戸・美濃 窯陶器	短頸壺	口縁～胴部上半	遺存高 1.7	8.6	-	良	内外暗茶褐色（施釉）	ち密	17 世紀代。
4	瀬戸・美濃 窯陶器	擂鉢	胴下半部片	-	-	-	良	内外赤茶色（錆釉）	長石，ち密	外面ロクロ目明瞭。 内面 14 本以上の縦位沈線。15 ～ 16 世紀。
5	瀬戸・美濃 産陶器	擂鉢	胴部片	-	-	-	良	内外赤茶色（錆釉）	ち密	
6	瀬戸・美濃 窯陶器	擂鉢		-	-	-	良	内外赤茶色（錆釉）	長石，ち密	外面ロクロ目明瞭。 内面縦位沈線。15 ～ 16 世紀。

第７図　01M・土塁出土遺物

第２節　ピット

ピット８基を検出した。遺構出土遺物は５遺構から出土し，遺物の年代観から戦国時代（16～17世紀初頭）と江戸時代後期（18～19世紀）に属すると考える。なお，01P.02Pを除く遺構は，全て土塁を壊して作られており，また出土遺物から，ピット全体について落城以降の所産である。

01Ｐ（第８.９図　図版１.３）

位置：北側調査区南。**確認面**：ソフトローム上面。**方位**：N-68°-E。**規模・平面形**：2.49m×0.93m×深さ0.4mの一辺が直線状の楕円形。**底面**：ほぼ平坦で，壁の立ち上がりは緩やか。**覆土**：４層。暗褐色土系の自然堆積層だが，全体に締まる。**遺物**：覆土中より瀬戸・美濃産天目茶碗片出土。所見：用途不明。

04Ｐ（第８図　図版１）

位置：南側調査区北。**確認面**：ハードローム上面。方位：N-58°-E。**規模・平面形**：1.0m×0.75m×深さ0.1mの楕円形。**底面**：やや凹凸がある。壁の立ち上がりは緩やか。**覆土**：１層。ローム粒を多く含む暗褐色土。**遺物**：なし。**所見**：用途不明。

08Ｐ（第８図　図版１）

位置：南側調査区南。確認面：ハードローム上面。**方位**：計測なし。**規模・平面形**：1.12m×1.3m×深さ2.2mの不整円形。**底面**：ほぼ平坦で，壁の立ち上がりは直立。ハードローム層1.1m，砂層0.1m，褐色粘土層0.6m，白色粘土層0.4mを掘り込んで底面とする。湧水はなし。覆土：土塁３Ｔの土層断面図中４～６層が該当する。粘土粒を全体に含む自然堆積層。**遺物**：なし。**所見**：土塁を切る形で掘り込んでいる。湧水はなく，井戸ではない。新しい掘り込みに該当する情報はないため，砂・粘土採取目的に掘られた近代以前のものか。

03Ｐ（第10図）

位置：南側調査区北。**確認面**：ハードローム上面。方位：N-42°-W。**規模・平面形**：全長2.95mで燃焼部1.85m×1.07m×深さ0.2m，焚口部1.25m×1.04m×深さ0.25mの緩やかなくびれ部をもつヒョウタン形。燃焼部の壁面には白色砂質粘土が巡る。また燃焼部焚口側に凝灰岩切石を配置する。**底面**：ほぼ平坦。**覆土**：燃焼部では，天井部粘土の崩落及び炭化物残滓がみられ，焚口部では，黒色土・ロームブロック等の堆積がみられた。**遺物**：焚口部からは，近世ないし明治期の陶磁器片が出土している。燃焼部からは，混入遺物として15世紀～17世紀の陶器片が出土しており図示した。**所見**：江戸時代後期～明治時代の炭焼窯である。

05Ｐ（第11図　図版１）

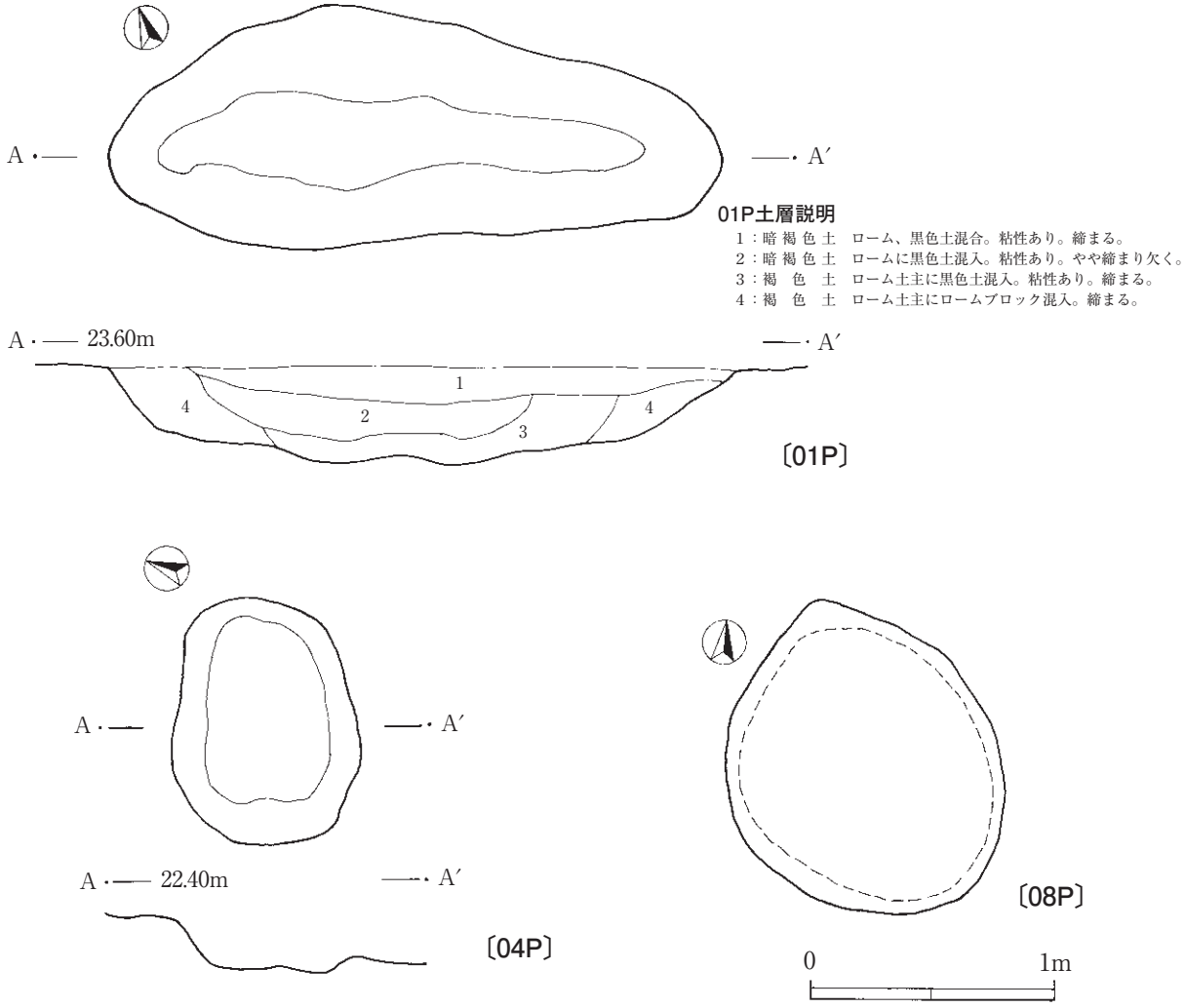
位置：南側調査区中央。**確認面**：ハードローム上面。**方位**：N-78°-E。**規模・平面形**：1.88m以上×1.17m×深さ0.2mの隅丸長方形。**底面**：平坦である。壁の立ち上がりは緩やか。**覆土**：１層。暗褐色土。厚さ４～５cmの白色粘土を全面に貼る。**遺物**：砕片のため図示できず。**所見**：粘土貼土坑である。土塁と重複関係にあり，土塁を切っている。土塁トレンチ掘削時に半分程度を消失した。

06ＡＰ（第11図　図版１）

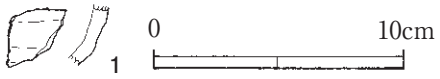
位置：南側調査区中央。**確認面**：土塁切土面。**方位**：N-78°-E。**規模・平面形**：4.53m×1.33m×深さ0.18mの隅丸長方形。**底面**：平坦である。壁の立ち上がりは緩やか。**覆土**：２層。暗褐色土及び灰褐色土。厚さ６cmの白色粘土を全面に貼る。**遺物**：常滑産・瀬戸美濃産陶器片が出土。**所見**：粘土貼土坑である。土塁及び06BPと重複関係にあり，土塁を切り，06BPに切られる。覆土の2.3層は間層で，規模を縮小して上部に06BPを作り変えている。土塁→06AP→06BPで新しい。

土塁遺物観察表（2）

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
7	瀬戸・美濃窯陶器	筒型香炉	底部 1/2 周	遺存高 2.5	-	6.9	良	外黄茶色（黄釉） 内淡黄灰色	ち密，雲母粒	底部ヘラ削り後 3 点貼り付け高台。登窯 6・7 小期。18 世紀
8	産地不明陶器	碗	高台部全周	遺存高 1.8	高台部径 3.5	-	良	外灰色一部淡緑灰色（施釉） 内淡緑灰色（施釉）	ち密	ロクロ調整。内面は全面灰釉。肥前系か。江戸時代
9	常滑窯陶器	片口鉢	口縁部片	-	-	-	良	内外赤褐色	長石，石英	ロクロナデ。10 型式。15 世紀後半。
10	常滑窯陶器	壺	口縁部 1/4	-	-	-	良	外灰白色～黒灰色 内茶褐色～暗茶灰色	長石多含 石英混入	内外面ロクロナデ。10 型式。15 世紀後半。
11	寛永通寶			外縁 2.5	内区 0.6	重さ 2.2g				



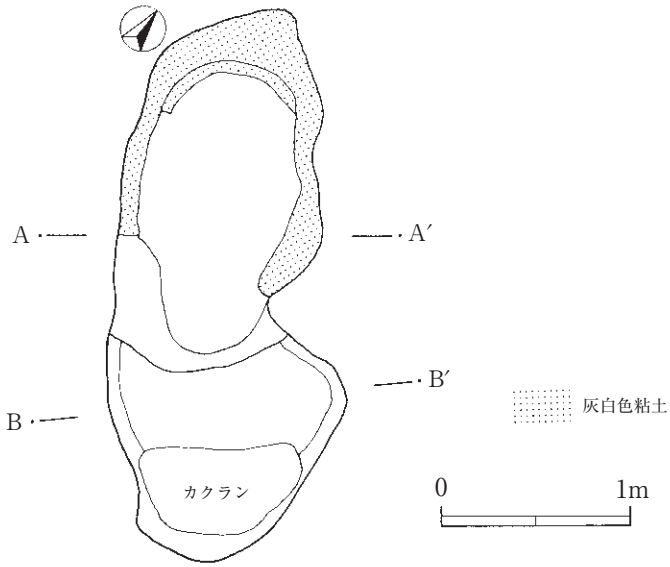
第８図　01P.04P.08P遺構実測図

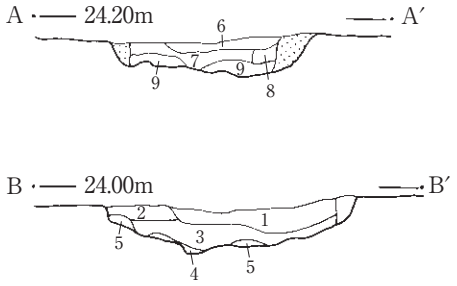


01P 遺物観察表

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	瀬戸・美濃窯陶器	天目茶碗	体部片	-	-	-	良好	内外 黒茶色 断面淡橙灰色	長石，ち密	ロクロ調整。内外面鉄釉。17 世紀。

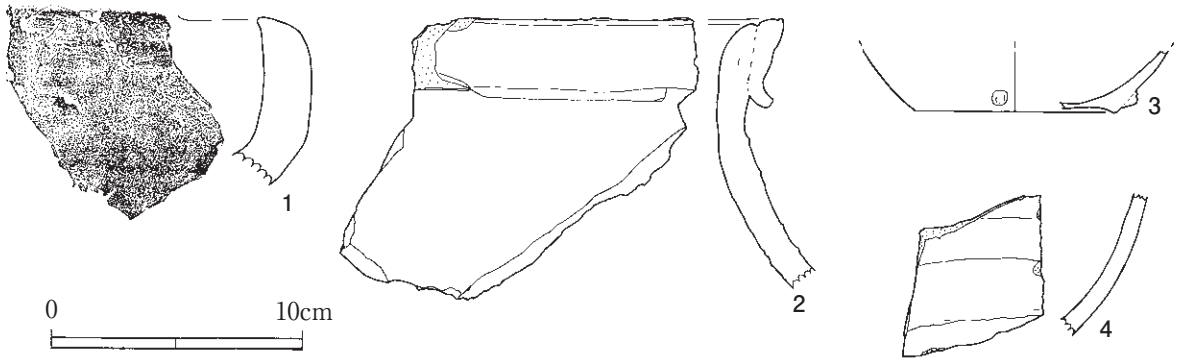
第９図　01P出土遺物





03P土層説明

1：暗 褐 色 土　黒色土にロームブロック混入。ほそほそ。
2：黒 褐 色 土　粒子細かく、やや締まる。
3：暗 褐 色 土　黒色土・ロームに炭化粒、焼土ブロック混入。
4：暗 褐 色 土　３層類似。炭化粒含まず。
5：褐　色　土　ローム粒、ロームブロック。
6：漆 黒 色 土　炭化物主体。
7：灰 白 色 土　灰白色粘土。
8：暗 褐 色 土　炭化粒主体に粘土粒含む。
9：赤 灰 色 土　赤色化した砂質粘土。



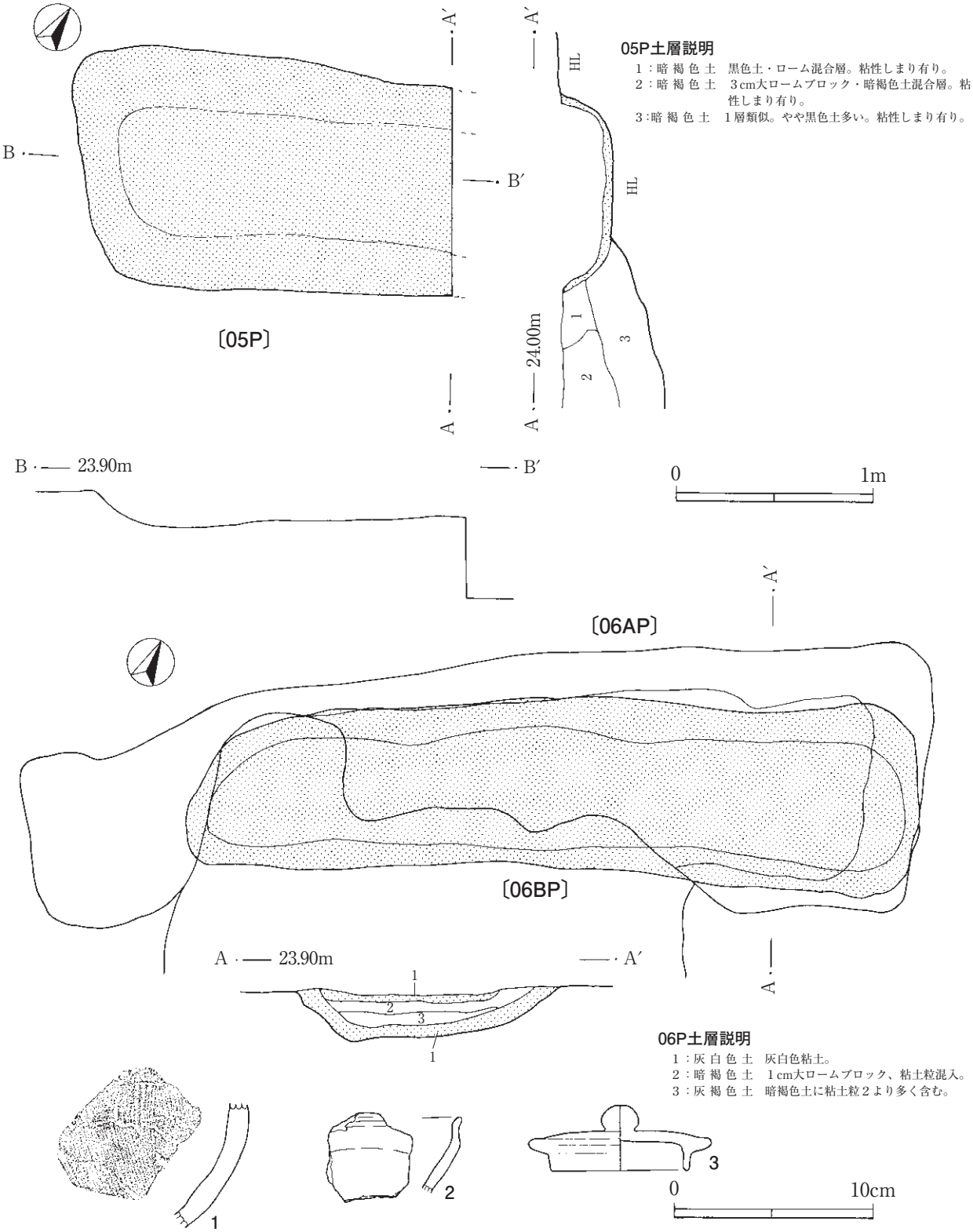
03P 遺物観察表

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	土製	風炉	口縁部片	-	-	-	良	内外淡橙白色 内面黒斑	銀雲母，長石 ち密	緩い波状口縁。
2	常滑窯 陶器	甕	口縁部	-	-	-	良	内外茶赤色	長石，石英	9 型式。15 世紀前半。
3	産地不明 陶器	香炉	底 部 ～ 体 部 1/3	遺存高 2.4	-	8.0	良	外淡肌灰色 内灰白色（黒釉？）	ち密	底部外面～体部下端に煤状固形物付着。 ボタン状突起有り。
4	瀬戸・美濃 窯陶器	碗	体部片	-	-	-	良	淡黄灰色 灰釉	ち密	外面下部無釉。17 世紀代。

第10図　03P遺構実測図・出土遺物

06ＢＰ（第11図　図版１）

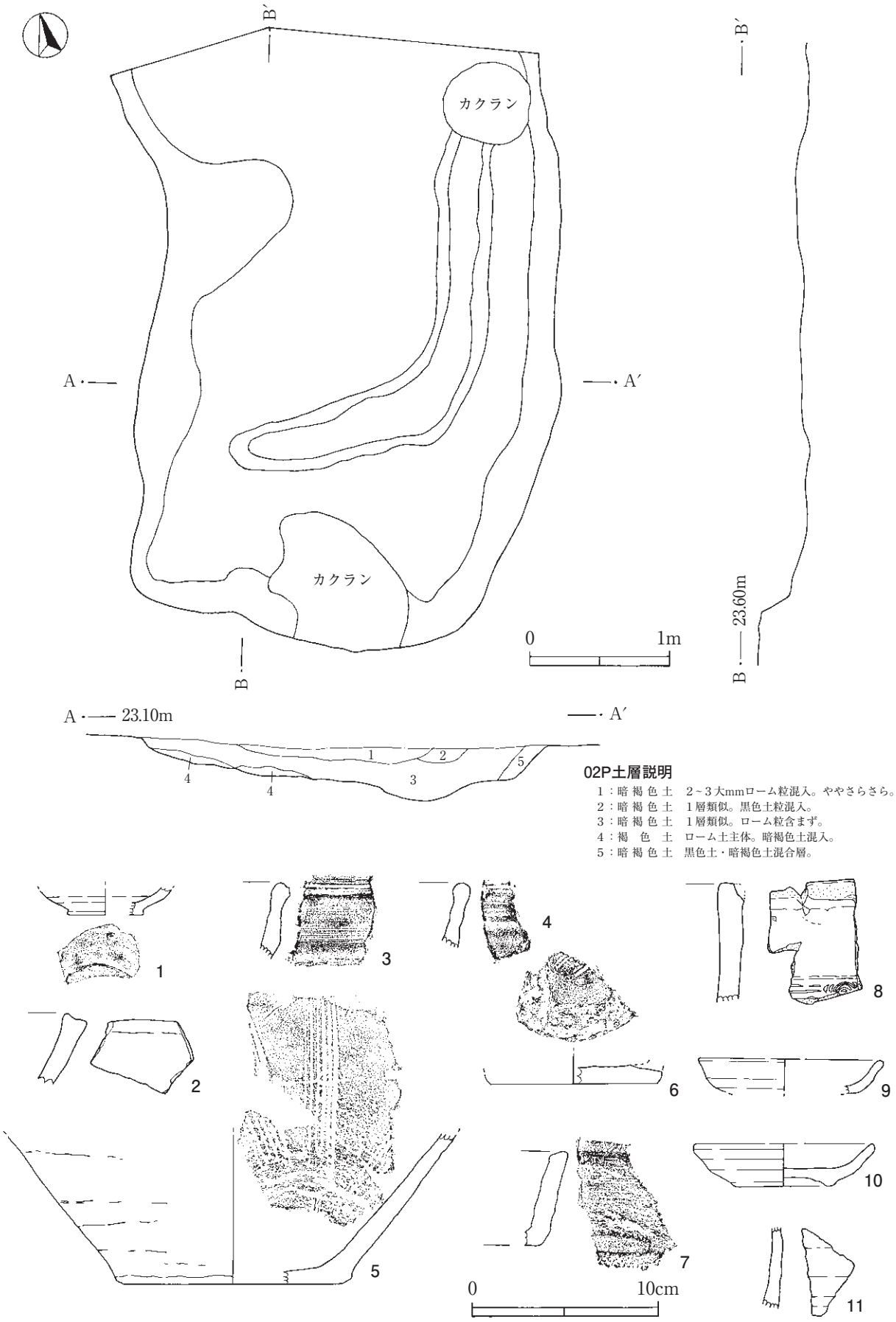
位置：南側調査区中央。**確認面**：土塁切土面。**方位**：N-78°-E。**規模・平面形**：3.69m×0.84m×深さ0.04mの隅丸長方形。**底面**：平坦である。壁の立ち上がりは緩やか。**覆土**：１層。暗褐色土。厚さ４～５cmの白色粘土を全面に貼る。**遺物**：備前産陶器蓋が出土。**所見**：粘土貼土坑である。土塁と重複関係にあり，土塁を切っている。06APを作り変えている。



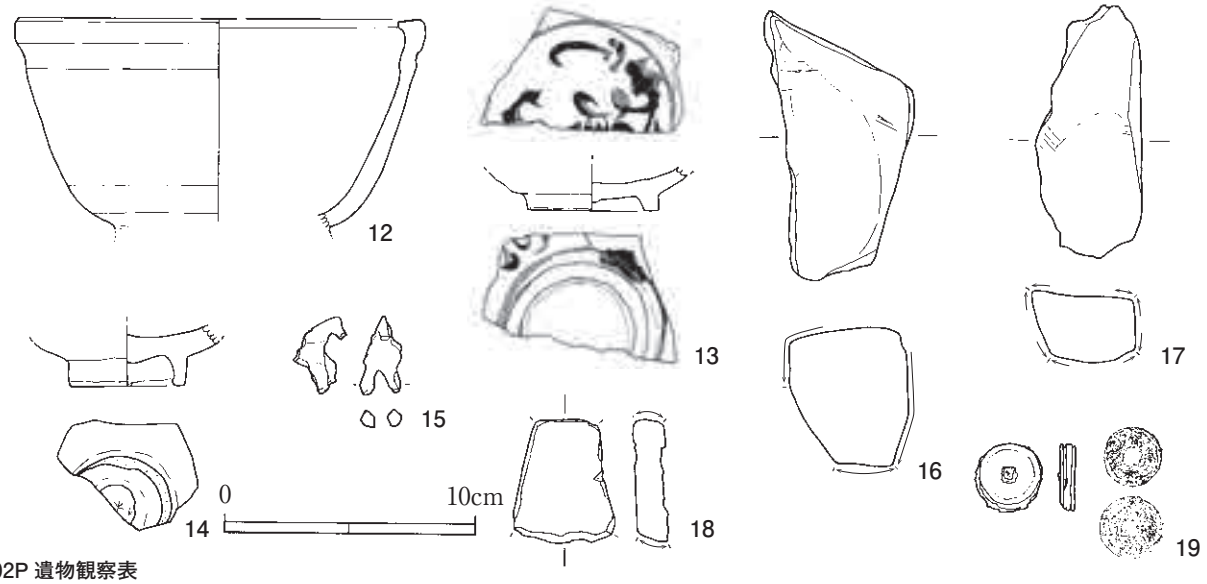
06P 遺物観察表

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	常滑窯 陶器	内耳 鍋	胴下半部	-	-	-	良好	内外淡橙褐色	長石，石英	
2	瀬戸・美濃 窯陶器	天目茶碗	口辺部片	-	-	-	良	内外茶黒色（鉄釉）	ち密	ロクロ調整。内外面鉄釉。17世紀。登窯2・3小期（Ⅱ期）か。優品。内面一部曜変。
3	産地不明 陶器	蓋	完存 （受け部一部欠）	3.2	受部径 6.8	最大径 9.2	良	外茶黒褐色（自然釉） 内茶色	ち密	ロクロ調整。円頭状鈕。江戸時代

第11図　05P.06P遺構実測図・出土遺物



第12図　02P遺構実測図・出土遺物（1）



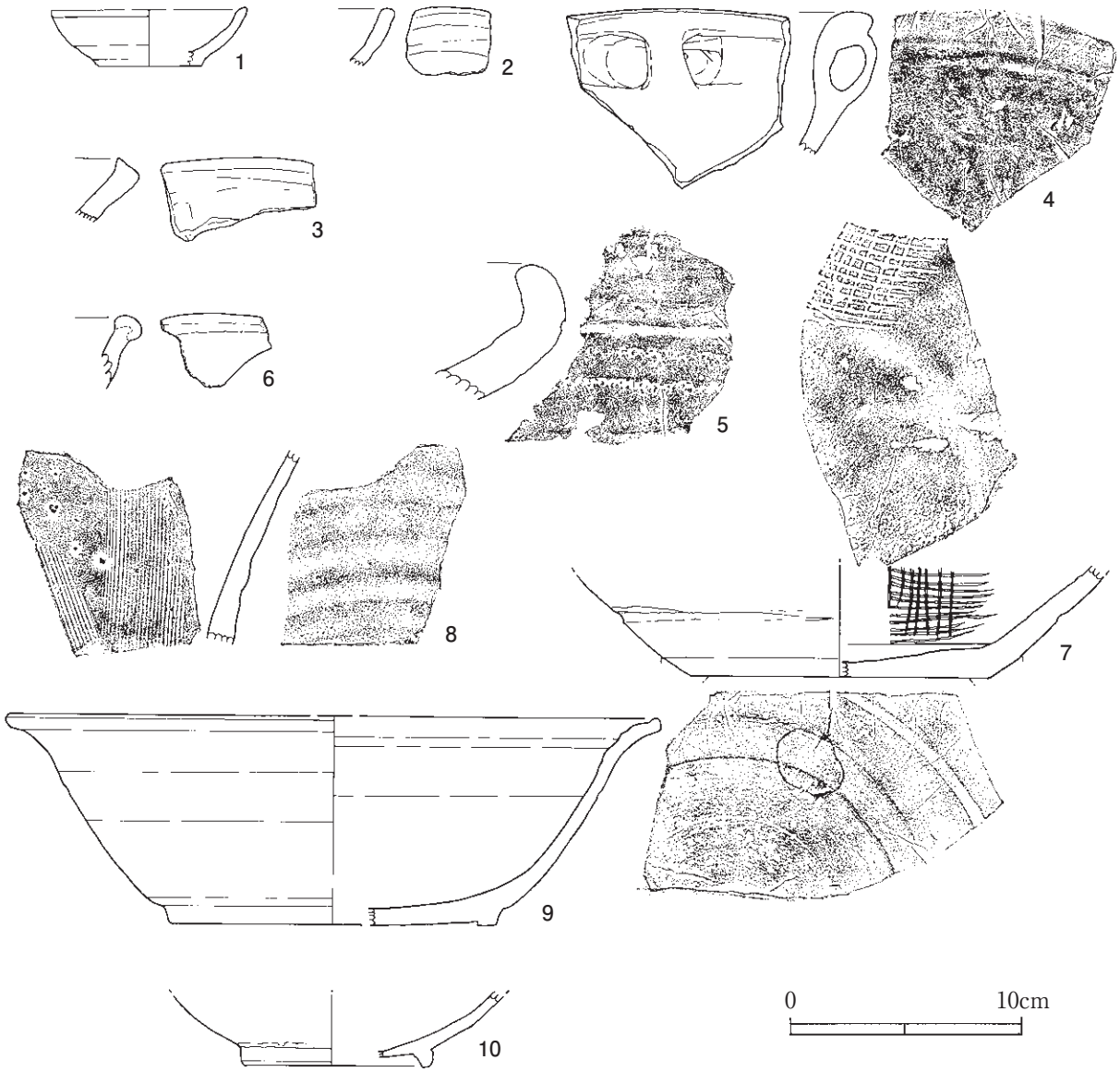
02P 遺物観察表

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	土器	かわらけ	底部 1/5 ～ 体部	1.3	-	2.0	良	内外橙褐色	長石，雲母多含	ロクロ調整。底部切り離し不明。
2	土器	内耳土鍋	口縁部片	-	-	-	良好	外暗褐色 内茶褐色	長石，雲母 赤色粒，砂粒	口縁部内外ロクロナデ。
3	土器	内耳土鍋	口縁部片	-	-	-	良好	外黒色 内暗橙褐色	雲母多含，長石	ロクロ調整。外面は煤による黒色化。
4	土器	内耳土鍋	口縁部片	-	-	-	良好	外暗橙褐色 内暗褐色	雲母，長石，砂粒	ロクロ調整。内面は煤付着。
5	土器	擂鉢	底部 1/3 ～ 胴部	遺存高 8.0	-	11.6	良	外底部～胴部下半黒斑 暗茶褐色 内茶褐色	雲母，長石，砂粒	粘土紐巻き上げ，外面ヘラナデ。16 世紀代。
6	土器	擂鉢	底部 1/4	遺存高 1.0		9.0	良	底部外面黒斑 内面茶褐色	雲母，長石，砂粒	内面底面に沈線。
7	土器	内耳土鍋	口縁～底部片	-	-	-	良好	内外淡灰褐色～黒茶褐色	長石，雲母，石英	外ロクロナデ。体部下端ヘラ削り。内口唇内削ぎ。北関東系浅型。
8	土器	火鉢	口縁～底部片	-	-	-	良	外暗茶黒褐色 内暗褐色～茶褐色	長石，雲母，砂粒	外なで。体部に沈線・同心円文を施文。 内ロクロナデ。16 世紀代。
9	瀬戸・美濃窯陶器	丸皿	口縁～体部 1/5	-	-	-	良好	内外淡緑灰色	密	ロクロ調整。灰釉。16 世紀後半。
10	瀬戸・美濃窯陶器	小皿	体～底部 1/4	2.3	9.5	5.2	良好	内外淡緑灰色	ち密	ロクロ調整。内外面総釉。16 世紀後葉（大窯第 3 段階）
11	瀬戸・美濃窯陶器（黄瀬戸）	香炉	胴部片	-	-	-	良好	外浅黄色 内灰白色	ち密	ロクロ調整。外面灰釉。
12	瀬戸・美濃窯陶器	鉢	口縁～体部	遺存高 8.3	16.0	-	良好	内外淡黄灰色（内外）	雲母	ロクロ調整。黄釉（内外）。登窯 6･7 小期。18 世紀
13	中国産磁器	青花文染付碗	底部 1/2	遺存高 1.9	高台部径 (外縁)5.2	-	良	内外素地は淡黄肌色で淡藍色の青花文	ち密	高台畳付砂目、底部外面一部露胎。中国漳州窯系。 16 世紀末～ 17 世紀初。
14	中国産磁器	染付碗	底部 1/4 周	遺存高 2.3	高台部径 4.5	-	良好	外淡青色 内黒灰色	ち密	底部内外面突出。高台畳付砂目。染付碗 F 群。 豊臣後期（1598 ～ 1615 年）。景徳鎮窯系。
15	土製品	馬形	馬頭部 前足部 胴部遺存	頭部～足端部 3.1	胴部 1.2	-	良	淡茶褐色	石英，長石	祭祀品，手びねり。馬を形どる。
16	砥石			全長 10.7	幅 5.7	厚さ 5.5	重さ 313.8g	淡黒灰色	凝灰岩質	磨り面は上辺を加え 4 面。 鎌の磨り痕見られる。
17	砥石			全長 10	幅 4.2	厚さ 2.8	重さ 128.5g	灰色	凝灰岩質	磨り面は 4 面。
18	土器	内耳土鍋		長辺 4.9	幅 4.0	厚さ 1.2	良	内外淡橙褐色	石英，長石	転用砥石。断面 4 面。表裏磨り痕。
19	1 寛永通寶 2 孔なし銭 3 不明文銭 4 寛永通寶	銅銭 真鍮か 鉄銭 銅銭		2.5 2.5 2.5	- - -	- - -	重さ 12.0g	重さ 3.0g (2,3, 破片込み）重さ 5.6g 重さ 3.4g		

第13図 02P出土遺物（2）

02P（第８.９図　図版１.３）

位置：北側調査区中央。**確認面**：ソフトローム上面。方位：N-20°-E。**規模・平面形**：4.46m以上×3.06m×深さ0.26mの不整長方形。**底面**：ほぼ平坦だが，中央東側にL字状に溝が配置される。幅0.4m深さ0.1m。西壁の立ち上がりは緩やかだが，東及び南壁は直立する。**覆土**：５層。暗褐色土系の自然堆積層だが，全体にやや締まりに欠く。**遺物**：覆土中より内耳土鍋・擂鉢等調理具，かわらけ・小皿・鉢等食膳具，馬形の祭祀具，舶載磁器等豪奢品，火鉢・砥石等生活用品等全般に及ぶ品々が出土。またアカニシの芯部が出土している。**所見**：土坑の用途は不明であるが，出土遺物の時期が16世紀～17世紀初頭に位置付けられることから，該期の所産と考えられる。



確認調査遺物観察表

	器種	器形	部位	計測値（cm）			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	土器	かわらけ	口縁部 1/5～底部	2.4	8.3	-	やや不良	内外淡灰色	長石，砂粒	ロクロ調整。内外ナデ。内弯形。D2-2T 白色系カワラケ。16 世紀後半。
2	土器	かわらけ	口縁部片	-	-	-	良	内外橙褐色	雲母，長石	内外ロクロナデ。直縁形。D2-2T 赤色系カワラケ。16 世紀後半。
3	土器	内耳土鍋	口縁部	遺存高 1.7	8.6	-	良	外暗褐色 内茶褐色	雲母，長石	内外ロクロナデ。D2-2T 16 世紀代。
4	土器	内耳土鍋	口縁～胴部	-	-	-	良	外淡黒色（煤） 内茶褐色	雲母，長石	内外ナデ。焼成後穿孔有。内耳形骸化で吊り下げるため の用途。16 世紀後半頃。D2-2T
5	土製	風炉	口縁部	-	-	-	良	内外赤茶色	雲母，石英	外磨き状ナデ。C4-4T 内ロクロナデ。16 世紀後半か。
6	瀬戸・美濃窯陶器	小型鉢	口縁部片	-	-	-	良	内外暗茶色（施釉）	ち密	玉縁状口縁。内外錆釉。江戸時代。排土中
7	瀬戸・美濃窯陶器	古瀬戸 卸目付大皿	底部 1/4 周，胴部下半	遺存高 4.8	-	12.6	良	淡肌色	ち密	外 底部～胴部下位回転ヘラ削り。C4-4T 内 縦横位の卸目。15 世紀代。
8	瀬戸・美濃窯陶器	擂鉢	胴部下半	遺存高 1.8	高台部径 3.5	-	良	内外黒灰色（施釉）	ち密	外ロクロ目明瞭。D2-2T 内 22 本程度の縦位沈線。内外錆釉。
9	瀬戸・美濃窯陶器	大平鉢	底部 1/4～口縁から胴下半まで	9.0	28	13.9	良	内外淡黄灰色（施釉）	ち密	内外ロクロナデ。D2-2T 登窯 6・7 小期。18 世紀か。
10	産地不明陶器	皿	胴部下半	遺存高 3.1	高台部径 7.8	-	良	内外緑褐色（施釉）	ち密	内外面ロクロナデ。A5-3T 新しいか。

第14図 確認調査出土遺物

確認調査出土遺物（第14図　図版３）

1.2.3.4.8.9は，02Ｐを含むトレンチ出土。5.7は土塁の南側部分内側のトレンチ出土。

第3章　ま　と　め

中世以降

遺構について

今回調査区は，米本城域四郭に隣接した位置である。検出された遺構は，土塁１条，溝（01M,02M,03M）３条，ピット（01P，02P，03P，04P，05P，06AP，06BP，08P）８基となる。**土塁**については，核となるハードロームを掘り残して積み上げたと想定される。その内部の一段低い平地に現在の加茂家邸があり，城域四郭に連なる防御上の施設とも考えられる。**溝**については，03Mが規模等詳細不明であるが，土塁に付随した堀と考える。ピットについては，土塁下の04Pを除いては土塁内側に配置される。粘土貼り土坑の05P・06AP・06BPについては，05Pが土塁を切っており廃城以後の生活痕跡で，17世紀代に想定される。02Pは大型土坑としたが，台地整形区画の一部とも考えられる。16世紀後半～17世紀初頭に位置付けられる。さらに下って03Pは，18～19世紀の炭焼き窯である。

遺物について

15～19世紀代で，生活用品・豪奢品・特殊品等多岐にわたる。

中世米本城跡に関わる遺物は，15世紀では瀬戸・美濃窯古瀬戸御目付大皿，常滑窯壺・甕・片口鉢及び16世紀後半主体の土器・陶磁器である。遺物としては瀬戸・美濃窯総釉小皿・灰釉丸皿・擂鉢，土器類ではカワラケ・内耳土鍋（浅型/埼玉，真壁焼/茨城）・擂鉢・火鉢（瓦質を含む）・風炉等がある。また，稀少品として中国産磁器の染付碗が出土している。茶の湯用品や中国産磁器碗など高い階層性が見いだされるが，その他日常生活用品の出土が多く，城跡ではなく集落跡の一部としての位置づけが可能である。

加茂文左衛門家伝世品として，中国産磁器染付端反皿５点があったことが「八千代市の歴史 通史編上」P370に道上氏によって報告されている。家老といわれた加茂家に，村上氏の遺品として伝世したもので16世紀後半期の資料である。

近世米本城跡は跡地となるが，加茂家の屋敷地としての生活痕跡がうかがわれる。17世紀の遺物は瀬戸・美濃窯鉄釉天目茶碗・短頸壺，18世紀では瀬戸・美濃窯大平鉢・黄釉鉢・黄釉筒形香炉，肥前焼皿（底部内面に五弁花文），18世紀～19世紀では堺・明石系擂鉢，美濃窯白磁壽文小皿のほか，そば猪口・土瓶・煎茶茶碗等が出土した。またその他に，土製品馬形，砥石，硯が見られる。

今回の成果について

遺物・遺構について述べたが，結果として米本城三郭・四郭の北側部分においては，部分的な土塁，堀等の防御施設はあるものの，日常生活の場として機能していたことが分かった。それは15世紀半ば～16世紀後半以降現在に至るまで継続している。

加茂家は戦国時代には，米本城主村上氏の家臣として仕え，千葉氏・原氏・後北条氏の関わりの中で戦闘に参加する。豊臣秀吉による全国統一への動きで，天正18年（1590）小田原征伐による後北条氏の滅亡で，後北条方は開城となり，米本城も同様の結末をたどったものであろうか。

続く徳川家康が関東に入部し，ほぼ下総国内は徳川一族・家臣，家康に降伏し傘下に入った武将が拠点となる各城に配置された。加茂家はその際にも在地に屋敷を構え，生活してきたことがわかる。遺物からみても稀少な中国産磁器の所有・茶の湯のたしなみ・硯の保持など，当初は当地域を所管した身分を有した人物と想定されよう。

参考文献

米本城跡　　1976　八千代市中世館城址調査団　八千代市教育委員会「八千代市中世館城址調査報告」

1979　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史」P195～215
1991　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史 資料編　原始・古代・中世」
2008　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史 通史編　上」P313～324　P362～372
正覚院館跡関連 1991　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史 資料編　原始・古代・中世」
2007　八千代市遺跡調査会「千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡」
2008　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史 通史編　上」P376～384
吉橋城跡関連　1983　八千代市教育委員会「千葉県八千代市北部遺跡群緊急発掘調査報告」
1991　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史 資料編　原始・古代・中世」
2008　八千代市教育委員会「千葉県八千代市妙見前遺跡ｂ地点発掘調査報告書」
2008　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史 通史編　上」P372～376
金堀城跡・楠ケ山館跡・小野田城跡・八木ケ谷城跡関連
1987　船橋市史編さん委員会「船橋市の遺跡　［船橋市史資料（二）］」
2000　船橋市教育委員会「平成11年度　船橋市内遺跡発掘調査報告書」
全般　2000　財団法人千葉県文化財センター「研究紀要20　中近世城館跡の構造と特質」

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばけんやちよし　よなもとじょうあとびーちてん
書名	千葉県八千代市米本城跡b地点
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	森　竜哉
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138番地２　TEL 047（483）1151代表
発行年月日	令和３年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よなもとじょうあと 米本城跡 bちてん b地点	よなもとあざうちじゅくみなみ 米本字内宿南 1732-1の一部	12221	190	35度 74分 72秒	140度 11分 63秒	20191203 ～ 20200210	上層500㎡	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米本城跡b地点	城館跡	中近世	土塁１条・溝３条・ピット８基	中国産磁器染付碗，常滑窯陶器壺・甕瀬戸・美濃窯陶器灰釉丸皿･擂鉢，土器類カワラケ･内耳土鍋・擂鉢・火鉢・風炉	
要約	米本城跡における調査として２例目である。米本城跡本体ではないが，隣接地の状況を把握することが重要であると想定された。結果として，中世から近世についての，米本城家臣加茂家の屋敷地での土地利用の一部を調査し，日常生活の場として機能していたことが解明された。				

図版１遺構［pit・土塁］

01P全景

02P全景

04P全景

05P全景

06AP全景

06BP全景

08P全景

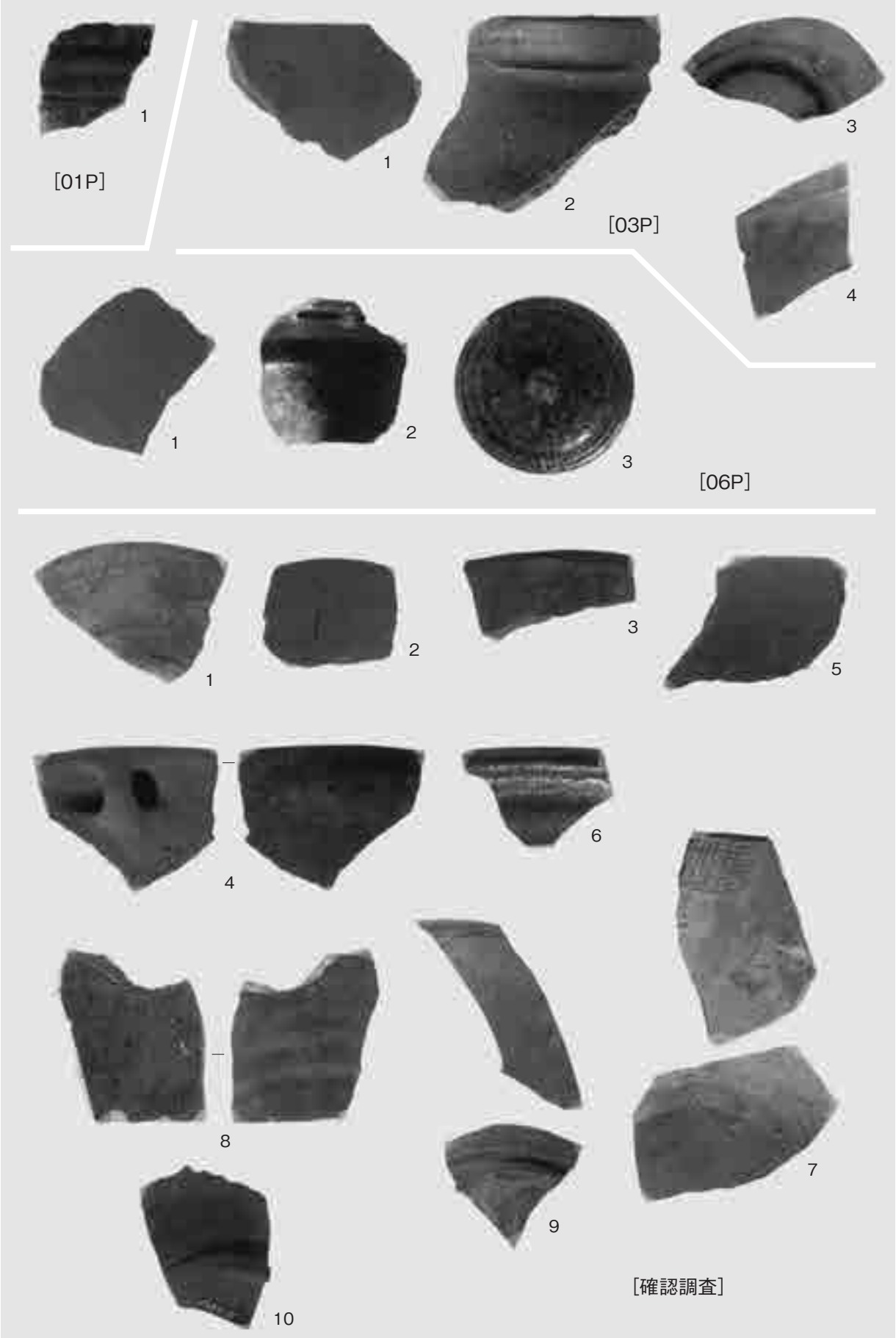
土塁１Ｔセクション

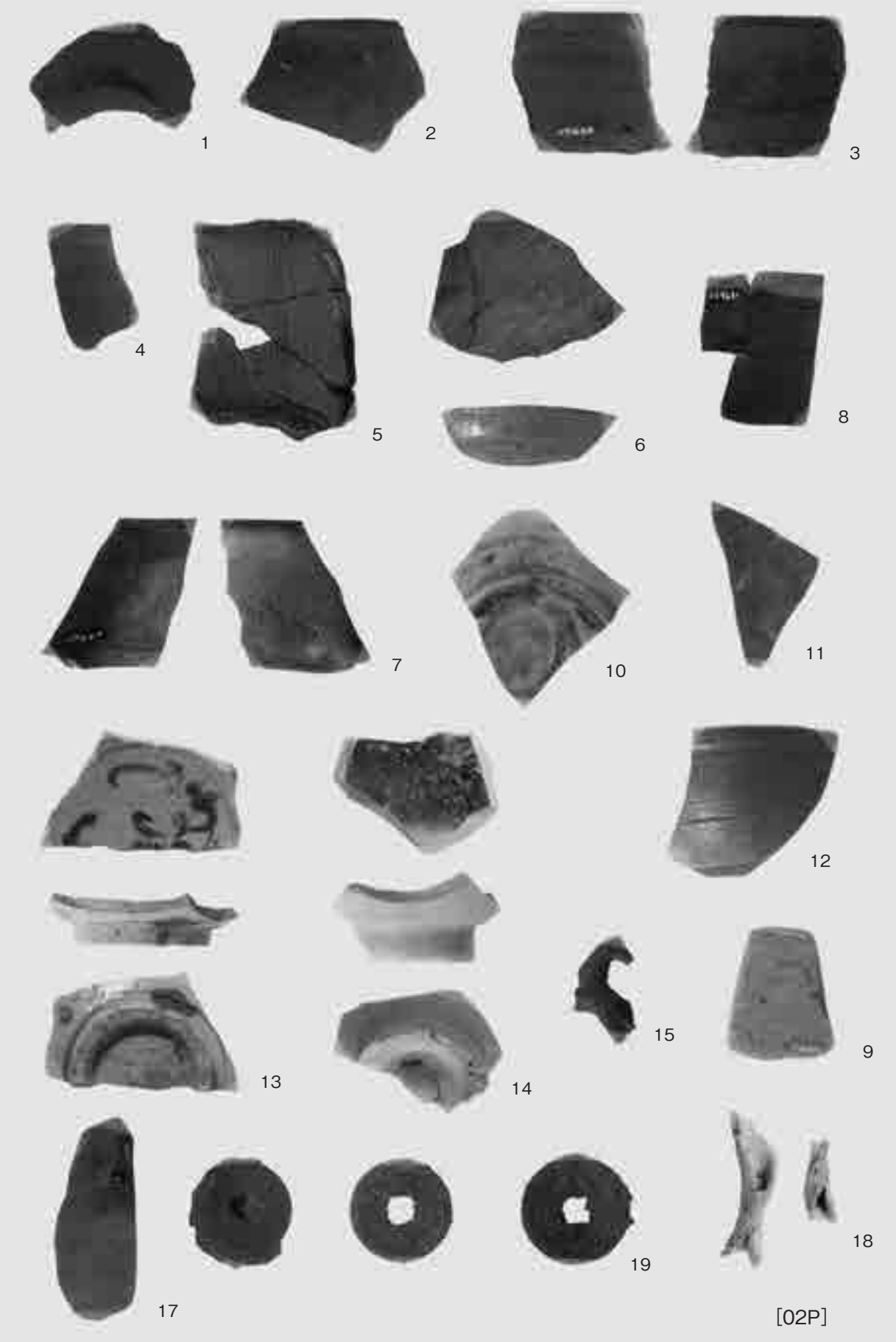
図版２遺構［土塁］・遺物［土塁・01M］

土塁２Ｔセクション

土塁３Ｔセクション

図版３遺物［01P.03P.06P.確認調査］




1
2
3
4
5
6
8
7
10
11
12
13
14
15
9
17
19
18
［02P］

千葉県八千代市　米本城跡ｂ地点
－共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　行　日　　令和３年３月25日
編集・発行　　八千代市教育委員会　文化・スポーツ課
〒276-0045　八千代市大和田138-２
TEL 047-483-1151（代表）
発　　行　　加茂　文雄
印　　刷　　金子印刷企画